

「神さぶ」の使用とその展開について

たにぐち ゆう
谷口 悠

同志社大学大学院博士課程後期課程

キーワード

日本語史, 上代語, 用法拡張, 接尾辞, 基本義

要旨

本稿は上代語「神さぶ」を対象に、コーパスなどを用いて、用法拡張について検討した。従来「神さぶ」は『万葉集』における使用例に焦点が当てられ、上代以降の使用はあまり注目されてこなかった。そこで、本稿では、上代から中世の「神さぶ」の用法を考察した。その結果、自然に対して多く使われていた「神さぶ」が中世には建物・住居に対して使われるようになったことが明らかになった。その理由は、自然から建物へ神意識が移行したためと考えられる。さらに、自然、人、建物に対して「神さぶ」が使われることから、「神さぶ」に通底する意味は「畏怖の念を引き起こす、非日常的な様であること」とした。

1. はじめに

山部赤人の有名な和歌に、「田子の浦にうちいでて見れば白たへの富士の高嶺に雪はふりつゝ」（『新古今和歌集』6・冬歌）がある。『百人一首』にも収められているこの歌の原歌は、「田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ富士の高嶺に雪は降りつつ」（『万葉集』3・318）である。「田子の浦ゆ」歌は、次の長歌を受けた反歌である（下線部は引用者による。以下同じ）。

- (1) 天地の分れし時ゆ神さびあめつち わか かむ [神左備] て高く 貴たふと き駿河なる富士の高嶺を天の原振りするが ふじ たかね あま ほらふ
放さ け見れば渡る日の影も隠かくらひ照る月の光も見えず白雲しらくももい行きはばかり時じく
そ雪は降りける語りつ継ぎ言ひ継ぎ行かむ富士の高嶺は (『万葉集』3・317)

本稿で注目したいのは、(1)に見られる「神さび」（終止形「神さぶ」）である。下線部は、富士山の形容について、神々しいと解釈できる。現代日本語でも、「神さぶ」は、文語表現として使われる¹。本稿では、このような「神さぶ」が、『万葉集』でどのように使用され、中古・中世にどのように展開するのかを考察する。その際、『万葉集』における「神さぶ」の使用状況と、中古・中世における「神さぶ」の使用状況を比較しつつ論じる。

2. 先行研究と本稿の目的

「神さぶ」は、接尾辞「さぶ」を語構成に含む語として注目されており、『万葉集』における意味・用法について詳しく言及した論に森本（1934）、若林（1985）がある。

森本（1934）は、「神さぶ」の意味・用法を当時の神観²と関連させ、「神さぶ」は、神としての本性を発揮するという原義を持っていたとする。しかし、「神」の原義が低下したために、「神さぶ」の原義は次第に離れ、人に対して使われるときは、「古びた」という意味のみを表すようになったことを指摘している。

若林（1985：32）は、「神さぶ」の意味を4つに分類した³うえで、意味の多様化に注目している。若林（1985）は、意味の多様化の背景に、時間を超越した存在である神・現人神（＝永久不変のもの）から長い時間を経たものが生じ、長い時間を経たものから古くなったもの・老いたものが生じる過程を想定している。

このように、『万葉集』における「神さぶ」は、「神」に関係する意味と「神」に関係する意味から外れた「古び老いる」という意味が見られると考えられてきたことが分かる。

しかし、『万葉集』内で分析が留まっており、筆者が確認した範囲で、『万葉集』以降の「神さぶ」を通時的に考察している研究は少ない。米山（1993：246）は、「平安期以降の「神さぶ」は、神社や杜、山・川・杉・松・月光・神楽等と共に詠まれており、神祇と深く関わる歌に頻繁に用いられる」と述べている。ただし、米山氏は具体例として歌二首を挙げるだけで、それ以外の韻文や散文における「神さぶ」の使用状況は説明されていない。また、若林（1985：36）は、『万葉集』以降の「神さぶ」の「意味・用法・環境については、今後さらに詳しく調査したい」としているが、詳しい調査はそれ以降なされていない。ここから、上代以降の「神さぶ」の使用例の検討が従来の研究では不十分であったと言える。

そこで、本稿では、『万葉集』における「神さぶ」の用例を再確認し、『万葉集』の「神さぶ」の用例と比べて、「神さぶ」が中古・中世においてどのように使われているのかを明らかにする。併せて、「神さぶ」の根底に「非日常性」があると捉え、「神さぶ」の意味変化過程に通底する意味を明らかにすることも目的とする。通底する意味を明らかにすることにより、意味変化過程の説明の妥当性に役立つと考えられるからである。

3. 調査対象

国立国語研究所が公開している『日本語歴史コーパス』（CHJ）において、時代「奈良・平安・鎌倉・室町」、語彙素「神さびる」「神さび」⁴で検索した。調査対象とするのは、CHJに収録されている40作品⁵である。CHJに収録されていない『うつほ物語』『浜松中納言物語』『狭衣物語』『栄花物語』『梁塵秘抄』（平安）『無名草子』（鎌倉）について、ジャパンナレッジの『新編日本古典文学全集』（『新編全集』と略）の古典本文全文検索において、文字列「神さび」「神さぶ」で検索した。また、CHJにおいて本朝部しか収録されていない『今昔物語集』（鎌倉）、『古本説話集』（平安）『古事談』『続古事談』（鎌倉）は『新日本古

典文学大系』(『新大系』と略)を用い、『打聞集』(平安)は『打聞集の研究と総索引』を用いた。CHJにおいて得られた重複を除く61例(奈良30例、平安20例、鎌倉10例、室町1例)、『新編全集』において得られた19例(平安15例、鎌倉4例)、『新大系』において得られた6例の合計86例を調査対象とした。

4. 『万葉集』における「神さぶ」の使用状況

「神さぶ」は名詞「神」に接尾辞「さぶ」が接続している。接尾辞の「さぶ」について、山田(1922:304)は、「名詞に接しその状態に振舞ふ意をあらはす」としている。大型の古語辞典においても、「名詞に接してそれらしく振舞う・それらしく見えるの意を表わす動詞を作る」(『時代別国語大辞典 上代編』)「性質・状態・行動などが、いかにもそれらしいさまを呈する意を表す動詞を作る」(『角川古語大辞典』)とあり、筆者もこの点に異論はない。したがって、「神さぶ」は、語構成に基づくと、神らしく振る舞うこと、神の本質を有しているように見えることを表すと考えられる。

『万葉集』における「神さぶ」について、武田(1924)、森本(1934)、小島(2000)を参考に、「神さぶ」が自然、人、皇族天皇に対して使われる場合の3つに分類する。

分類基準について述べておく。「神さぶ」対象に木、山、島、岩石などが一定数見られたため、上位概念である自然を分類基準に立てた。人と皇族天皇に分けたのは、身分の高低を考慮に入れるためである。すなわち、分類基準を人のみにしてしまうと、皇族天皇とそれ以外の人との身分差が捨象されてしまう。皇族天皇をそれ以外の人と別扱いするため、皇族天皇と(それ以外の人)とに分けた。この分類基準に従い、『万葉集』において使われる「神さぶ」を対象別に分類した結果を表1に示す。

表1 『万葉集』における「神さぶ」対象別用例数

対象	用例数
自然	21
人	5
皇族天皇	4
総計	30

表1より、「神さぶ」が自然に対して使われる例は、『万葉集』における「神さぶ」全体の7割を占める。次いで人に対して使われる例が5例、皇族天皇に対して使われる例が4例であり、合わせても『万葉集』における「神さぶ」全体の3割に過ぎない。このことから、『万葉集』において、「神さぶ」は自然に対して使われることが非常に多いと言える。

表2は、表1の自然に対して使われる例を細分化し、草木、山、島・埼、岩石、土地に分け、用例数を示した結果である。表2より、「自然」の具体物の用例数は多い順から、草木、山と続く。以下、「自然」の具体物の用例を取り上げ、「神さぶ」の使用状況を検討する。

表2 「自然」の具体物とその用例数

	草木	山	島・埼	岩石	土地
用例数	8	6	3	3	1

(A) 自然

[ア] 草木

- (2) 磯いその上のつままを見れば根ねを延はへて年深としふかからし神さびかむ [神左備] にけり
 (『万葉集』19・4159)

[イ] 山

- (3) 弥彦いやひこおのれ神さびかむ [神左備] 青雲あをくものたなびく日すらこさめ小雨そほ降る
 (『万葉集』16・3883)

[ウ] 島・埼

- (4) a. 聞きしごとまこと貴たふたく奇くすしくも神さびかむ [神左備] をるかこれみづしまの水島
 (『万葉集』3・245)
 b. 神さぶかむる [可牟佐夫流] 荒津あらつの崎まに寄する波間なみなくや妹こに恋ひ渡りこなむ
 (『万葉集』15・3660)

[エ] 岩石

- (5) 神さぶかむる [神左振] 岩根いはねごごしみくまりやまきみ吉野の水分山を見れば悲しも
 (『万葉集』7・1130)

[オ] 土地

- (6) (前略) 臣おみの木も生おひ継つぎにけり鳴く鳥との声も変よはらず遠かむき代よに神さびかむ [神左備] 行
 幸いでましどころ処かむ
 (『万葉集』3・322)

これらの歌は自然の景物を賛美している。(2)は、樹齢の長い木の崇高な様を詠んだ歌である。「神さぶ」が根を伸ばしている「つまま」という草木に対して使用され、「つまま」の年を重ねた姿を讃えている。「日長くなりぬ」(『万葉集』5・867)や「幾代を経てか」(『万葉集』15・3621)などの時の経過表現と「神さぶ」が共に使われることで、時の経過の意味が「神さぶ」の意味にも使われるようになったと考えられる。(3)は、山の神聖な様子を詠んだ歌である。いつも雨が降っている弥彦山に対して「神さぶ」が使われている。(3)以外に、富士山、耳高山、芳野山、生駒山などの山が「神さぶ」と共に用いられている。(4a)では貴く不思議である水島に対して、(4b)では「荒津の埼」に対して「神さぶ」が使用され、島や埼を称賛している。(5)では岩の状態に「ごごし」が使われている。ごつごつとした岩石に生命力が宿ると考えられたためか、「神さぶ」を使うことで、岩石の荘厳さが表現されている。(6)は、山部赤人が伊予の温泉で作った歌である。温泉のほとりの木立を見て、木立が茂り、鳥の声も変わらないことを詠んだうえで、行幸があった土地を讃えていることが読み取れる。

このように、「神さぶ」は自然賛美の表現として機能していることが分かる。その背景には自然のあらゆるものに神が宿る「八百万の神」信仰が想定される。

(B) 人

(7) a. ^{をとめ} 娘子らが ^{たまくしげ} 玉櫛笥なる ^{たまくし} 玉櫛の ^{かむ} 神さび [神] ^{いも} けむも ^あ 妹に逢はずあれば
 (『万葉集』4・522)

b. ^{いそのかみ} 石上布留の ^{かむすぎかむ} 神杉 ^{こひ} 神さぶる [神成] ^{あれ} 恋をも ^{さら} 我は更にするかも (『万葉集』11・2417)

c. ^{かむ} 神さぶ [神佐夫] ^{いな} と否にはあらずは ^{あきくさ} たやは ^{ひも} たかくして ^と 後にさぶし ^{のち} けむかも
 (『万葉集』4・762)

d. ^{かむ} 神さぶ [神佐夫] ^{いな} と否にはあらず ^{あきくさ} 秋草の ^{ひも} 結びし ^と 紐を ^と 解かば ^と 悲しも
 (『万葉集』8・1612)

(7a) (7b) は、序詞を用いた序歌である。(7a) は、玉櫛が玉櫛笥に長期間入っていたこと、(7b) は、石上神宮の杉が樹齢を重ねたことを受けて「神さぶ」が用いられている。時の経過を人に当てはめると、「神さぶ」は年老いた様を表すと考えられる。序詞を用いることなく、「神さぶ」が年老いた様を表すのが (7c) (7d) である。これらは、男性からの誘いを断っているのは「神さぶ」ことが原因ではないと解釈できる。男性からの誘いを断るのに、「神さぶ」は十分な理由になり得た。言い換えると、男女間の恋の世界において、「神さぶ」は避けるべき状態であった⁶と言える。ここから、「神さぶ」は恋をするのにふさわしくない状態、つまり、「古び老いる」という意味で使われていたと考えられる。

(C) 皇族天皇

(8) a. ^{かむ} やすみし我が ^{かむ} 大君神ながら ^{よしのがはたぎ} 神さび [神左備] ^{かふち} せすと ^{たかどの} 吉野川 ^{たかどの} 激つ河内に ^{たかどの} 高殿を
^{たかし} 高知り ^{くにみ} まして ^{くにみ} 登り立ち ^{くにみ} 国見を ^{くにみ} せせば (後略) (『万葉集』1・38)

b. ^み なゆ竹のと ^こ を ^わ よる ^{おほきみ} 御子さにつら ^{はつせ} ふ我が ^{かむ} 大君は ^{はつせ} こもり ^{かむ} りくの ^{はつせ} 泊瀬の ^{かむ} 山に ^{かむ} 神さび [神
 左備] ^{たはごと} に ^{たはごと} 齋き ^{たはごと} いますと ^{たはごと} 玉梓 ^{たはごと} の ^{たはごと} 人 ^{たはごと} そ ^{たはごと} 言 ^{たはごと} ひ ^{たはごと} つる ^{たはごと} 逆言 ^{たはごと} か ^{たはごと} 我が ^{たはごと} 聞き ^{たはごと} つる ^{たはごと} 狂言 ^{たはごと} か (後略)
 (『万葉集』3・420)

(8a) について、根来 (2006: 95-96) は、「神ながら」は「主語の内面に主眼をおいて神であることに言及する語」であるのに対し、「神さぶ」は「主語の外面に主眼をおいてその神らしさを認識」する語であると指摘している。ここから、(8a) は、内面・外面ともに持統天皇の振る舞いを讃えていることが窺える。(8b) は、石田王の死に対し「神さぶ」が使われており、「死者への敬意」(倉持 2020: 23) を表している。このように、皇族天皇に対して「神さぶ」が使われると、彼らを賛美する表現として機能すると言える。

以上より、『万葉集』における「神さぶ」の使用状況は、次の2点にまとめられる。

- 自然や皇族天皇に対する使用：神らしさが注目され、賛美表現として機能する。
- 人に対する使用：時の経過が注目され、年老いた様を表す。

5. 中古・中世における「神さぶ」使用状況

前節では、『万葉集』における「神さぶ」を対象別に分けて使用傾向を見た。では、中古・中世において「神さぶ」は、どのように使われているだろうか。本節では、具体的に次に示す問を考えたい。

〔問〕自然、人に対して使われる「神さぶ」は継続して見られるのか。継続して見られるならば、韻文、散文による使用傾向は確認できるか。

調査範囲では、『万葉集』において確認できた皇族天皇に対して使われる例は見られなかった。住まいや社を「神さぶ」と表現していたものが多く見られたので、「建物・住居」の分類基準を設けた。「神さぶ」に対して使われる例の内、2例以上使われていた具体物を基準として定め、1例のみであった場合はその他に含めた。表3は、中古・中世における「神さぶ」を対象別に分類した結果である（作品ごとの結果は12頁の資料参照）。

表3 中古・中世における「神さぶ」対象別用例数

対象	中古	中世	総計
建物・住居	5	12	17
人	11	2	13
自然	9	1	10
様	2	2	4
音声	2	1	3
櫛	2	0	2
年月	1	1	2
その他	3	2	5
総計	35	21	56

表3より、自然に対して「神さぶ」は、継続して使われていることが分かる。ただし、『万葉集』においては幅広い対象に「神さぶ」が使われていたが、中古・中世において「神さぶ」は、(9)のように、草木に限定した使用である。くわえて、その使用は韻文に集中していた（散文中は2例のみ）。該当の「神さぶ」は『梁塵秘抄』に3例、『後拾遺和歌集』『栄花物語』に各2例、『拾遺和歌集』『金葉和歌集』『今昔物語集』に各1例である。ここから、自然に対して用いられる「神さぶ」は歌語と捉えられていたと考えられる。

- (9) a. 大淀のみそぎ^{おほよど}幾世^{いくよ}になりぬらん^{ひめ}神さびにたる浦の姫松
 (『拾遺和歌集』巻10・神楽歌・594)
- b. 君が代はかねてぞ著^{しる}き春日山^{かすがやま}双葉^{ふたば}の松の^{かみ}神さぶるまで
 (『梁塵秘抄』巻2・神社歌)
- c. 南殿^{なむでん}ノ御前^{おほむまへ}ノ桜^{さくら}ノ器^きノ大^{おほ}キニ^{かむ}神サビテ^{えもいは}艶ヌガ、(後略)
 (『今昔物語集』巻24・第32)

(9a)(9b)のように、草木の中でも特に松に対して「神さぶ」と表現されている⁷。(9c)のように、桜に対して「神さぶ」と詠まれる例は調査範囲で他に見られない点で興味深い。自然に対して使われる「神さぶ」は、『万葉集』においては21例あったが、中古・中世

において 10 例である。このことから、自然に対して使われる「神さぶ」は中古・中世にかけて減少したと言える。

では、なぜ、中古・中世において自然に対して使われる「神さぶ」は減ったのだろうか。

それは、「八百万の神」信仰が希薄化したから、あるいは万葉人の神意識が廃れたからと考える。後者を詳述すると、古代日本民族が持っていた、神を招き降ろす際の依代に樹・岩などの自然物を捉える神意識（松村 1933：179）が次第に失われたということである。

「神さぶ」は人に対してどのように使用されているだろうか。表 3 より、該当の「神さぶ」は 13 例あり、『万葉集』から継続して見られると言える。(10) のように、「神さぶ」を肯定的に解釈できる例が見られるようになる。

(10) 博士の命婦は知るたよりあれば、灯籠の火のいとほのかなるに、あさましく老い神さびて、さすがにいとようものなど言ひみたるが、人ともおぼえず、神のあらはれたまへるかとおぼゆ。
〔『更級日記』「宮仕への記」〕

(10) は、博士の命婦の話姿について、神様が立ち現れるようであったと菅原孝標女が称賛している場面である。この場面での「神さぶ」は驚くほどの神々しさであったと肯定的に捉えるのがよかろう。「あさましく」が「神さぶ」を修飾しており、「神さぶ」を非常に取り立てている。このことから、「神さぶ」は、素晴らしい驚嘆を表していると言える。

表 3 から明らかなように、自然や人に対して使われる用例を差し置いて、建物・住居に対して使われる用例数が多い。(11a) (11b) (11c) のように、具体的な神社名や天皇の住居（二重線部）を挙げて「神さぶ」が使われている例が散見された。

(11) a. 稲荷山しるしの杉の年ふりて三つの御社神さびにけり
〔『千載和歌集』巻 18・雑歌下〕

b. 水の江のよしの宮は神さびてよはひたけたる浦の松風
〔『新古今和歌集』巻 17・雑歌中〕

c. (前略) ふち吹く風に神さび松尾の最初の如月の初午に富くばる
〔『梁塵秘抄』巻 2・靈驗所歌〕

(12a) (12b) のように、通常の住居に対しても「神さぶ」が使われている。これは、依代を自然に求める神意識が、神社や天皇の住居に移行したためと考えられる。通常の住居に対して「神さぶ」を使うのは、神社や皇居に対する使用から派生した結果であろう。

(12) a. 屋ノ体旧クシテ神サビタリ。
〔『今昔物語集』巻 24・第 31〕

b. 滝の音ことにすさまじく、松風神さびたる住ひ、飛瀧権現のおはします、那智のお山にさ似たりけり。
〔『平家物語』巻 2〕

他に 3 例以上用例が見られたものとして、(13a) (13b) のような目に見える様子や、(14a) (14b) のような耳に聞こえる音声に対して「神さぶ」が使われているものもある。

(13) a. 歌のよしあしはいかが定むらん、神さびてあたる面持色、絵にかきたる心地して、これよりかは誰をかはと見えたり。
〔『栄花物語』巻 32〕

- b. 齋宮の御下りのほどもこそ、何となく神さび、いみじけれ。(『無名草子』16)
- (14) a. 容貌いときよげなる人の、声づかひものものしく神さびて読みあげたるほど、
いとおもしろし。(『源氏物語』「少女」)
- b. はらはらと吹き払ふ木の下風の音も、例の所には似ず、神さび、心細げにて、
心あらん人に見せまほしきを、いとど眺め入りたまへる人柄は、言ひ知らず異
なり。(『狭衣物語』巻3)

また、「神さぶ」に対して使われる2例以下の表現もある⁸ことから、『万葉集』と比べて、「神さぶ」の対象となる表現が多様化していることが分かる。

本節の内容をまとめると、以下の通りである。

- 自然に対して使われる「神さぶ」は、『万葉集』から継続して見られるが、『万葉集』において見られたほど多用されていない。対象となる自然は草木、とりわけ松が大半で、韻文に集中している。
- 人に対して使われる「神さぶ」も、『万葉集』から継続して見られる。『万葉集』において見られなかった肯定的に解釈できる例が存在する。
- 中古・中世において、住居・建物に対して使われる「神さぶ」が、自然や人に対して使われる例よりも多く確認できる。「八百万の神」信仰が希薄したため、依代を自然に求めることから、神を祀る建物や天皇の住居に求めることへと神意識が移行し、通常の住居に対しても「神さぶ」が用いられるようになったためと考えられる。

6. 「神さぶ」に通底する意味

第4節で「神さぶ」は『万葉集』において、自然に対して多用されていたことを確認した。第5節の「神さぶ」の使用状況を合わせると、「神さぶ」は「自然→人→建物・住居」に対して使われる流れがある。であるならば、その流れを説明する、「神さぶ」に通底する意味がある⁹と考えられる。筆者は、関本(1994)、松村(1933)を参考に、「神さぶ」に通底する意味を次のように提案する。

【通底する意味】 畏怖の念を引き起こす、非日常的な様であること

- (15) 弥彦おのれ神さび〔神左備〕青雲のたなびく日すら小雨そほ降る
(『万葉集』16・3883) ((3) 再掲)

- (16) 聞きしごとまこと貴く奇しくも神さび〔神左備〕をるかこれの水島
(『万葉集』3・245) ((4a) 再掲)

関本(1994: 153)は、(15)について「一般の土地と異なる、特異なそして目に見える気象が「神さぶ」の状態を保証する」、(16)について「尋常ならざる状態であったので「神さび居る」とした」と評しており、「神さぶ」のもつ非日常性に注目していると言える。

松村(1933: 180)は、「神さぶ」に自然神に対する「畏怖の念」があると述べている。

(17) 茂岡に神さぶ [神佐備] 立ちて栄えたる千代松の木の年の知らなく

(『万葉集』6・990)

(17) は、長寿の象徴とされる松が「神の世の姿のままずっと栄えてある」(古橋 1988: 84) 様子を表している。栄えるものは滅びる栄枯盛衰を一般的とすると、「ずっと栄えてある」状態は、栄えてあるものが滅びない点で、非日常的である。(17) は自然賛美の歌であることから考えるに、「神さぶ」に松村氏の言う「畏怖の念」があると解釈できる。「非日常性」と「畏怖の念」を合わせると、筆者の提案する通底する意味が導き出される。

通底する意味を踏まえ、自然以外に対する「神さぶ」の使用状況を捉え直してみよう。「神さぶ」は、皇族天皇に対して使われると、人為を越えた行動を表すことがある。

(18) やすみし我が大君神ながら神さぶ [神左備] せすと吉野川激つ河内に高殿を高知りまして登り立ち国見をせせば (『万葉集』1・38) ((8a) 再掲)

(18) において「神さぶ」の具体的な内容は、大君が「吉野川激つ河内に高殿を高知りまして」である。激しい河の中に宮を立てるのは非日常的なことであり、そうした姿に対して畏怖の念を伴う。このような非日常的なものに対する畏怖の念は、人や住居に「神さぶ」を用いた例にも通底する。第4節で、恋をするのに相応しくない年老いた状況を「神さぶ」とした 762、1612 歌を見た。年老いることは多田 (1994: 92) によれば、神に近づき、「人間の属する日常から離脱した状態を意味する。そこには、日常の側からするとつよい畏怖が感じ取られていた」とあるように、人に対して「神さぶ」を用いる例でも畏怖の念が伴っていたと言える。そして、第5節で確認したように、神社や天皇の住居に対して「神さぶ」が使われていたことは、そうした建物が日常の生活からすると逸脱した空間であり、それらに畏怖の念が込められていたことを反映していると捉えられる。

7. まとめ

本稿は、『万葉集』において用いられている「神さぶ」が、中古・中世においてどのように使われているか、および、「神さぶ」の意味変化過程に通底する意味について考察した。まとめると次の3点である。

- 「神さぶ」は「神らしく振舞う」動作的な意味から状態的な意味へと転義したが、通底する意味に、「畏怖の念を引き起こす、非日常的な様であること」が指摘できる。
- 『万葉集』において自然に対して使われる用法が多かったが、中古・中世には減少し、建物・住居に対して使われる用法が代わりに見られるようになる。その理由は、「八百万の神」信仰の希薄化、あるいは自然から神社や皇居といった建物に依代を求める神意識が移行したことだと考えられる。
- 人に対して使われる「神さぶ」は、上代では、年老いた様を神に近づいて非日常的存在になったことと捉え、結果的に現実の男と結ばれない負のイメージであった。一方、中古以降、神が現れたような姿としての正のイメージで捉える例が見られる。

【注】

- 1 小型国語辞典において「かみさびる」「かんさびる」の形で立項されている。
「かみさびる」：古びてこうごうしくなる。かんさびる。「杉木立の中の一びた社」文かみさぶ
（『明鏡国語辞典 第3版』（2022））
「かみさびる」：文く古びていて／神聖で）おごそかな感じがする。かんさびる。「神さびた境内」
（『三省堂国語辞典 第8版』（2022））
「かんさびる」：①こうごうしくなる。②年をへて古めかしくなる。古風になる。▷「かみさびる」
とも言う。文語的。（『岩波国語辞典 第8版』（2019））
- 2 松村（1933：180）の言葉を借りれば、当時の神観とは、自然神に対して「荒ぶる神として畏敬の念」を示し、人文神（天神、祖先神）に対して「親愛と讃仰との情念」を示すものであった。
- 3 ①神として行動する。②神々しい。③（主体が対象を）神のように扱う。④古くなる。老いる。
- 4 連用形名詞「神さび」も先行研究にならい、用例に含めた（CHJでは『万葉集』の3例のみ）。
- 5 文学作品：『土佐日記』『竹取物語』『伊勢物語』『落窪物語』『大和物語』『平中物語』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『和泉式部日記』『堤中納言物語』『更級日記』『讃岐典侍日記』『蜻蛉日記』『大鏡』（平安）／『宇治拾遺物語』『十訓抄』『方丈記』『徒然草』『海道記』『建礼門院右京大夫集』『東関紀行』『十六夜日記』『とはずがたり』『保元物語』『平治物語』『延慶本平家物語』（鎌倉）／『虎明本狂言集』『天草版平家物語』『天草版伊曾保物語』『天草版金句集』（室町）
和歌集：『万葉集』（奈良）／『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』『金葉和歌集』『詞花和歌集』『千載和歌集』（平安）／『新古今和歌集』（鎌倉）
- 6 「神さぶ」が避けるべき状態であった理由について、東（1986：84）は、「相聞の世界にあって、女たちは求婚を受ける立脚点を喪失することに他ならないから」と述べている。なお、小野寺（2006：25）は、「神さぶ」が相聞歌で使われると、「近寄り難い人への恋、長い間思っていた恋、しばらく遠のいていた恋」を表すとし、「神さぶ」に年老いたという意味を読み取っていない。
- 7 『万葉集』においても「茂岡に神さび立ちて栄えたる千代松の木年の知らなく」（『万葉集』6・990）と松を「神さぶ」と表現していた例がある。散文において自然に対して使われる「神さぶ」は、他に『栄花物語』に1例（「水の流れ、神さびたる松のけしきなど、なべての所に似ず」（『栄花物語』巻34））見られる。
- 8 その他に該当する対象は、心、話、弾き方（以上中古）、万物、書物（以上中世）である。
- 9 古橋（1988）は、「さぶ」に「始源の状態」が根底にあると捉え、「神さぶ」の意味について考察している。

【参考文献】

- 小野寺静子（2006）「「さぶ」考—万葉集を中心に」『北海学園大学人文論集』35, pp.1-25.
川端善明・荒木浩校注（2005）『新日本古典文学大系 41 古事談 続古事談』岩波書店。

- 倉持しのぶ（2020）「「神ながら 神さびせすと」一人麻呂『吉野讃歌』についての考察』『美夫君志』101, pp.19-31.
- 国立国語研究所（2023）『日本語歴史コーパス』（バージョン 2023.3, 中納言バージョン 2.7.2）
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search>（2024年3月22日確認）
- 小島恵子（2000）「万葉集巻四・五二二番歌の「神さびけむ」について」『創造と思考』10, pp.15-20.
- 今野達校注（1993-1999）『新日本古典文学大系（33-37）今昔物語集』（1-5）岩波書店.
- 関本みや子（1994）「「神ながら 神さびせす」の意味—吉野讃歌理解の一助として」『関東短期大学国語国文』3（多田みや子（2006）『古代文学の諸相』翰林書房に再録）
- 武田祐吉（1924）「かむさぶ」『神と神を祭る者との文学』古今書院, pp.240-248.
- 多田一臣（1994）「「神さぶ」ということ—紀郎女と家持」『大伴家持』至文堂, pp.87-105.
- 根来麻子（2006）「「神ながら 神さびせす」考—表現意義と機能、万葉集における位置づけをめぐる」『万葉語文研究』2, pp.81-106.
- 東茂美（1986）「神さぶ—藤原麻呂・坂上郎女の贈答の一首」『文学・語学』108, pp.76-86.
- 東辻保和（1981）『打開集の研究と総索引』清文堂出版.
- 中村義雄・小内一明校注（1990）『新日本古典文学大系 42 古本説話集』岩波書店.
- 古橋信孝（1988）「さぶ」『古代語を読む』桜楓社, pp.84-88.
- 松村武雄（1933）「萬葉集に於ける宗教・神話」『萬葉集講座 第2巻』春陽堂, pp.177-182.
- 森本健吉（1934）「萬葉集の神・神さび考」『文学』2（7）, pp.66-93.
- 山田孝雄（1922）『日本文法講義』宝文館.
- 米山敬子（1993）「「□さぶ考」—「水さびにけり」の解釈のために」『関西外国語大学研究論集』57, pp.241-254.
- 若林玲子（1985）『万葉集』における「さぶ」系語彙について』『富山女子短期大学紀要』20, pp.28-38.
- 〈辞典〉
- 上代語辞典編修委員会編（1967）『時代別国語大辞典 上代編』三省堂.
- 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編（2012）『角川古語大辞典 第2巻』角川学芸出版.

【付記】

本稿は、2022年度日本語学理論研究Ⅲ（担当：乾善彦）の学期末レポートを大幅に加筆修正したものである。

『万葉集』の引用において [] 内は「神さぶ」の原文表記を表す。『拾遺和歌集』『千載和歌集』『新古今和歌集』の引用本文は『新日本古典文学大系』（岩波書店）による。

【資料】中古・中世における作品ごとの「神さぶ」対象別用例数

作品名	建物・住居	人	自然	様	音声	櫛	年月	その他	計
土佐日記	0	0	0	0	0	0	0	0	0
竹取物語	0	0	0	0	0	0	0	0	0
伊勢物語	0	0	0	0	0	0	0	0	0
落窪物語	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大和物語	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平中物語	0	0	0	0	0	0	0	0	0
枕草子	0	0	0	0	0	0	0	0	0
源氏物語	0	1	0	0	1	2	1	2	7
紫式部日記	1	0	0	0	0	0	0	0	1
和泉式部日記	0	0	0	0	0	0	0	0	0
堤中納言物語	0	0	0	0	0	0	0	0	0
更級日記	0	2	0	0	0	0	0	0	2
讃岐典侍日記	0	0	0	0	0	0	0	0	0
蜻蛉日記	1	0	0	0	0	0	0	0	1
大鏡	0	0	0	0	0	0	0	0	0
うつほ物語	0	2	0	0	0	0	0	0	2
浜松中納言物語	0	1	0	0	0	0	0	0	1
狭衣物語	0	0	0	1	1	0	0	0	2
栄花物語	0	2	2	1	0	0	0	0	5
梁塵秘抄	2	0	3	0	0	0	0	0	5
古本説話集	0	0	0	0	0	0	0	0	0
打聞集	0	0	0	0	0	0	0	0	0
古今和歌集	0	1	0	0	0	0	0	0	1
後撰和歌集	0	1	0	0	0	0	0	0	1
拾遺和歌集	0	1	1	0	0	0	0	0	2
後拾遺和歌集	0	0	2	0	0	0	0	0	2
金葉和歌集	0	0	1	0	0	0	0	0	1
詞花和歌集	0	0	0	0	0	0	0	0	0
千載和歌集	1	0	0	0	0	0	0	1	2
宇治拾遺物語	1	0	0	0	0	0	0	0	1
十訓抄	0	1	0	0	0	0	0	0	1
方丈記	0	0	0	0	0	0	0	0	0
徒然草	1	0	0	0	0	0	0	0	1
海道記	0	0	0	0	0	0	0	0	0
建礼門院右京大夫集	0	0	0	0	0	0	0	0	0
東関紀行	1	0	0	0	0	0	0	1	2
十六夜日記	0	0	0	0	0	0	0	0	0
とはすがたり	1	0	0	0	0	0	0	0	1
保元物語	0	0	0	0	0	0	0	0	0
平治物語	0	0	0	0	0	0	0	0	0
延慶本平家物語	2	0	0	0	0	0	0	0	2
今昔物語集	3	1	1	0	1	0	0	0	6
古事談	0	0	0	0	0	0	0	0	0
続古事談	0	0	0	0	0	0	0	0	0
無名草子	1	0	0	2	0	0	0	1	4
新古今和歌集	1	0	0	0	0	0	1	0	2
虎明本狂言集	0	0	0	0	0	0	0	0	0
天草版平家物語	1	0	0	0	0	0	0	0	1
天草版伊曾保物語	0	0	0	0	0	0	0	0	0
天草版金句集	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	17	13	10	4	3	2	2	5	56